

山梨県若手研究者奨励事業費 研究成果概要書

所属機関 山梨県立大学職名・氏名 講師 大村 梓

印

1 研究テーマ

翻訳における言説構築の過程が文化形成に与える影響

2 研究の目的

本研究の背景には、1868年の明治維新後の日本において西欧の影響を受けながらどのように近代化が行われてきたのかという大きなテーマが存在する。現代の日本社会では、我々の生活の多くの側面において西欧の影響を受けているが、そのような中でも日本の伝統的な文化要素は維持され続けている。日本人は、江戸から明治への転換期に西欧と伝統的価値観の間で揺れ動いてきたといえるだろう。明治・大正・昭和という激動の時代において、当時の近代日本人たちがどのように近代日本を作り上げてきたのか、という大きな命題に本研究は翻訳という文化活動から迫るものである。

本研究では特に、大正・昭和初期の近代文化の形成が西欧文学の翻訳にどのような影響を受けてきたのかを明らかにすることを目的とした。当時の日本人たちは西欧から輸入された新しい概念（自由、恋愛など）を、どのように日本の文化の中で理解されるような日本語に訳すのかに苦心した。それは単に外国の言葉を日本語に変換するという作業だけではなく、西欧的概念をどのように日本文化の中に移植するのかという文化構築という活動も含んでいる。文学者や翻訳家たちがそのような苦勞をして訳した西欧文学の日本語訳を読んで、近代日本人たちは新しい文化とは何か、西欧文化とは何かを理解して、学んでいったのだ。そしてそれは自らの文化を形成する基礎となった。

現代日本においても多くの翻訳書が存在するが、当時は現代とは異なり、翻訳家たちが近代日本文化そのものを作り出すという重い責任を負っていた。現代のようにメディアが発達していない当時は、文学が社会の中でなす役割は非常に大きいものであった。彼／彼女らが作り上げた訳語は、新しい日本の文化の中で新しい概念、つまり言説を作り出すことになった。そして日本の若手作家たちは、翻訳を通して西欧文化の影響を受けながら近代日本文学・文化を作り上げていったのだ。児童文学を始めとする一般の人々に向けての翻訳文学もまた、子供たちに対してどのように人生を生きていくべきかのお手本を示すこととなった。

本研究は文化形成の過程を翻訳が作り上げた言説構築から見ていったが、その一番の特徴としては文学者など知識人のみではなく、児童文学を取り上げることによって子供たちへの影響も見ていったことである。それによって、より多層的な文化形成のあり方を明らかにすることが出来た。

留意事項

- ① 3枚程度で作成してください。
- ② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。

3 研究の方法

具体的な研究の方法としては、大正・昭和初期において活躍した二人の翻訳家を取り上げた。

一人目は、フランス語から日本語への詩の翻訳を多く行い、また散文も訳すことによって詩の言葉だけではない分野にまでその活動の裾野を広げた新潟県出身の翻訳家・堀口大學である。研究代表者である大村梓はすでに堀口に関する研究については研究蓄積を持っている。特に堀口大學とフランスモダニズム作家であるポール・モーランの日本語訳に関しては、国内外で多くの学術発表、日本語と英語での論文発表を行っている。

次に村岡花子を取り上げた。村岡は山梨県出身であり、特に児童文学の翻訳家として活躍した。彼女の翻訳を取り上げる理由としては、文学者や知識人の作り上げる言葉だけではなく子供たちへの言葉を考察することによって、翻訳による文化形成の過程をより多層的に見ていくことが出来ると考えたからであった。すでに研究代表者である大村は、山梨県立大学の講義において、村岡の『赤毛のアン』の翻訳についての講義を行い、一般層に彼女の翻訳が与えた影響について考察を行っていた。

具体的な研究方法としては、当初予定していた通りに概ね行うことができた。

(1) すでに研究蓄積のある堀口大學の翻訳論・翻訳の実践が当時の文学者層に与えた言説構築の文化的影響と、村岡花子の翻訳論・翻訳の実践が当時の一般の人々に与えた言説構築の文化的影響を比較し、読者層の違いによる翻訳の文化への影響についての差異を明らかにする。

→これによって得られた結果は学術論文として発表された。(4にて詳述。)

(2) 新潟県出身である堀口大學と山梨県出身である村岡花子の翻訳がどのような地域的影響下にあるのか(文体と文化概念に着目)その差異を明らかにする。

→山梨県立文学館、及び新潟県長岡市立中央図書館にて、地元で発行されている雑誌等の調査を行った。その結果、堀口の翻訳は文化的意図が強いのに対して、村岡の翻訳は山梨英和女学校での教師という経歴が影響しているのか非常に教育的意図が強いことが分かった。

(3) 研究分担者である日本近代文学・翻訳研究の専門家である東京工業大学名誉教授のリース・モートン博士を招いて、以上の研究結果を踏まえ、これらの要素が日本近代文学全体の文化形成に与えた影響についてシンポジウムを開催し、議論を行う。

→2017年1月に山梨県立大学においてシンポジウムが開催され、それによって得られた知見をもとに議論が行われた。(4にて詳述。)

同言語内、異なる読者層、そして地域性という3つの観点に焦点を当てて研究を行う、という独自性を保つことができたと考える。

留意事項

① 3枚程度で作成してください。

② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。

4 研究の成果

本研究の成果は、1月17日に山梨県立大学で行われた国際シンポジウム「翻訳と文化：近代から現代にかけての文化形成過程」において、広く山梨県民に発信された。本シンポジウムでは日本近代文学・翻訳研究の専門家である東京工業大学名誉教授のリース・モートン博士をオーストラリアからお招きし、講演と討論に参加して頂いた。平日にも関わらず37名の参加者があり、討論では参加者から多くの質問がされ活発な議論が行われた。同日、会場において行ったアンケート結果においても、新しい知識を得られることが出来たとの声が聞かれ、県民に対して広く翻訳と文化について考えてもらう良い機会となったと考える。(研究成果報告書にて詳述。)

また研究の成果は2017年3月に発行された学術雑誌『山梨国際研究』において、「翻訳と近代日本文化を巡る一考察：堀口大学と村岡花子を例に」という題目で審査の結果、学術論文として発表された。本論文では研究の成果をまとめ、出版物として発表することが出来た。(研究成果報告書にて詳述。)

5 今後の展望

本研究費の支援を受けて、多くの資料調査を行うことが出来た。山梨県立文学館に訪問し、山梨の文学に関する資料調査を行い、新潟県長岡市立中央図書館堀口大学コレクションにおいては、地元で発行されている堀口研究の雑誌を発見することが出来た。今後は、本研究で得た研究蓄積をもとに、より深く翻訳と文化形成の関係性について引き続き研究を行う。山梨県立大学に勤務しているという地の利を生かし、村岡花子の翻訳についての研究を山梨県立文学館や山梨県立図書館を利用しながら、地域に根ざした研究を行っていきたい。本研究期間では時間の関係で行えなかったが、村岡花子が英語教師として勤務していた山梨英和女学校(現在の山梨英和大学)に残されている資料の調査や、関係者に向けてのインタビューなども行えたらと考える。

6 研究成果の発信方法(予定を含む)

すでにシンポジウム、そして日本語での学術論文という形で研究成果は発表されているが、今後は英語での学術論文の発表を目指していく。現在、The Journal of The Oriental Society of Australia(オーストラリア東方学会論文誌)への投稿を目標に、英語での論文を執筆中である。また日本語での学術論文を基礎にした形で、日本語の単著の出版を目指す。これまでの研究成果を踏まえた上ですでに執筆を行っているが、本年夏までには原稿を書き上げ、出版助成への応募、そして出版社への持込を行いたいと考えている。

留意事項

- ①3枚程度で作成してください。
- ②特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。